
共同研究の経過と概要

荒川章二

1. 研究の目的

本研究報告特集は、2015～2017 年度に実施された本館基盤研究「「1968 年」社会運動の資料と展示に関する総合的研究」の研究成果報告書である。

本研究が対象とした 1960 年代末は、革新自治体など戦後革新運動の新しい戦術と「個」「私」の主体性を重視する新しい社会運動の高揚期が重層的に同時展開した時代である。後者の社会運動のうち、学生運動分野では、これまでの学生自治会主体の運動とは異なり、大学の意義、学問研究の意義を問い、生産性の論理が支配する社会のあり方とそこでの自分の「生」を重大な関心事とした「大学紛争の時代」が現出した。一般社会運動としては、ベトナムの戦場化に見られる冷戦期の世界体制と日本の役割を切り口に戦争の加害と被害の関係性を問う市民的平和運動が、かたや、公害の告発運動や公共性を押し立てた開発政策の正当性を問う運動が全国的な広がりを見せた。

前者の「戦後革新」的社会運動は、革新自治体など 1970 年代後半以降の福祉・環境政策の転換などに大きな影響を与えたが、後者の「個」を重視する社会運動が切り開いた世界観は、それ以上に、思想的あるいは運動のありようについて長期的なインパクトを有しており、半世紀を経た今日まで少なからぬ影響を与えている。

本共同研究は、本館第六展示室に世界の中の「1968 年」として部分展示されている同時的な世界の激動のありようを前提として、日本における後者の「個」を重視する社会運動を再定義し、可能な限り総合的に検討することを目的とした。この時期の社会運動については、反戦平和運動、三里塚闘争に代表される開発に対する意義申し立て、水俣病・四日市大気汚染などの公害反対運動、あるいは様々な地域住民運動などがそれぞれ個別に研究され始めているが、横断的な研究は進んでおらず、特に実証研究の蓄積が薄い学生運動分野を含む総合研究はほぼ皆無に近い。本研究が目指したものは、これらの社会運動を、確かな資料に基づいてそれぞれの運動の実態を再検討しつつ、組織的な集団研究として、この時代の社会運動（市民運動、住民運動、学生運動など）に共通する性格とそれぞれの運動の個性を検討することであり、その成果を、一つは共同研究最終年の本館企画展示として、もう一つは一般研究成果として、学会への問題提起を行うことであった。

資料について確認しておく、一般社会運動関係では、立教大学共生社会研究センターが、ベ平連 吉川勇 資料、宇井純 公害問題資料、横浜新貨物線反対運動資料などの収集・公開を進めており、水俣病関係資料では水俣病センター相思社・水俣市立水俣病資料館・熊本学園大学水俣学研究センターにおいて資料の保存・公開を行っている。三里塚問題では「成田空港 空と大地の歴史館」が

一次資料収集と目録化・公開を順次進めており、本研究でもこれらの運動資料に依拠して、各分野の運動史研究を進めた。

問題は、こうした分野横断的な専門的資料館を有せず、かつ、各大学文書館などの取り組みにはかなりの凹凸があり、総体としての資料収集・整理が必ずしも進んでいない学生運動分野である。そのため、一次資料を基本として、この分野を検討する前提条件を整えるべく、本館では、1968-69年東大闘争資料（ビラ、パンフ類など5,000点）、同裁判関係資料を、さらに研究がほとんどない日大闘争についても、ダンボールで数十箱に及んだ大量の関係資料を受け入れ、これらの資料整理を進めつつ、展示準備と共同研究を進めることとした。これらの資料群自体が多様なセクトや大学当局資料、さらに他大学や他の社会運動分野の資料を含んでおり、個別大学の運動像解明以上の意義が与えられるだろうが、これらと各大学文書館や個人が所蔵している学生運動資料類を組み合わせれば、当時の学生層の運動の全体像に迫る第一歩を踏み出すことが可能だろうと期待したのである。また、当時の大学闘争に関しては、全国の多くの大学への広がりをもったにもかかわらず、大学史研究においては、資料発掘および運動の解明はまだ緒についたばかりであり、この資料状況と研究状況に一石を投じることも課題とした。

2. 研究組織

共同研究の組織とメンバーは以下の通りであるが、本研究は、本館の2017年度企画展示「「1968年」―無数の問いの噴出の時代―」準備と並行した共同研究であるため、共同研究会議・展示プロジェクト会議を共同運営・同時開催とした。従って、展示プロジェクト委員は、共同研究を主として見れば研究協力者となり、展示についても共同研究固有のメンバーの協力が不可欠という関係の中で運営された。ここでは、共同研究の報告書であるので、下記に、両委員会を兼任する研究者以外の館外展示プロジェクトメンバーを、研究協力者として記す。展示プロジェクトを主体としてみた場合のメンバー構成については、企画展示図録巻末〔国立歴史民俗博物館『企画展示「1968年」無数の問いの噴出の時代』2017年10月〕を参照されたい。

【共同研究員】（◎は研究代表者、○研究副代表。所属などは共同研究期間中のもの）

館外

安田 常雄	神奈川大学法学部 特任教授
河西 英通	広島大学大学院文学研究科 教授
小杉 亮子	京都大学文学研究科アジア親密圏・公共圏教育研究センター 研究員
平井 一臣	鹿児島大学法文学部 教授（期間中に同大学理事）
清水 靖久	九州大学大学院比較社会文化学府・研究院 教授
大串 潤児	信州大学人文学部 准教授
原田 敬一	仏教大学歴史学部 教授
根津 朝彦	立命館大学産業社会学部 准教授
木村 智哉	日本学術振興会 特別研究員
黒川 伊織	神戸大学国際文化学研究科国際文化学研究推進センター 協力研究員

平野 泉	立教大学共生社会研究センター	学術調査員
道場 親信	和光大学現代人間学部	准教授 * 2016 年 3 月まで

館内

関沢まゆみ	本館研究部	教授
○原山 浩介	本館研究部	准教授
川村 清志	本館研究部	准教授
◎荒川 章二	本館研究部	教授
中野 良	本館 機関研究員	* 2016 年 3 月まで

【研究協力者】

相川 陽一	長野大学環境ツーリズム学部	准教授
鈴木 玲	法政大学大原社会問題研究所	教授
友澤 悠季	長崎大学水産・環境科学研究科	准教授
谷合佳代子	大阪産業労働資料館	館長
矢作 正	「技術と社会」資料館	館長

3. 研究経過

1) 研究会と資料調査

【2015 年度】

2015 年度は当初 2 回の研究会の予定であったが、基本的な資料に関する共同研究メンバー全体での調査、それによる資料に対する認識の共有、および研究の方向性と展示の基本方針を検討するために、3 回の合同会議を持つことにした。また、適宜、個別調査を実施した。

◇第 1 回研究会 2015 年 5 月 17 日(日) 国立歴史民俗博物館

メンバー相互の関心を紹介しあった後、館蔵資料につき、東大闘争資料、日大闘争資料、1970 年代ミニコミ資料群の閲覧を実施、その後、研究の進め方に関する代表の問題提起、および各大学文書館資料の予備調査結果の報告の後、各メンバーが所属する機関の関係資料紹介を含めて、研究の方向性や可能性に関する討議を行った。

◇資料調査 2015 年 7 月 11 日(土)～12 日(日) 参加 10 人

大阪地方の社会運動資料十数万点を所蔵する大阪産業労働資料館、および公害問題資料を所蔵する大阪西淀川区のおおぞら財団（公害地域再生センター）の資料調査を行い、財団研究員の説明を受けた。翌 12 日、一部の委員が「四日市公害と環境未来館」を観覧し、公害告発運動の当事者である澤井余四郎氏との懇談を持った。

◇第 2 回研究会 2015 年 11 月 14 日(土)～15 日(日)

初日は、研究対象の時代の代表的な社会運動である三里塚の空港建設反対運動の大量の資料を「成田空港 空と大地の歴史館」（千葉県芝山町）にて閲覧、およびフィールドワーク、2 日目は国立歴史民俗博物館に日大闘争の当事者 4 人を招き、研究メンバー全体としての聞き取りを行い、

それを踏まえた討論を行った。

◇第3回研究会 2016年3月5日(土)～6日(日) 立教大学

初日は、東大闘争時の全学共闘会議議長であった山本義隆氏の聞き取りを行い、その後、企画展に関する第一次たたき台を提示し、討論を行った。2日目は、立教大学共生社会研究センターで資料の概要説明を受けたのち、各自の関係分野の資料閲覧を行った。

◇個別調査

東北大学史料館 (2015年10月22日～23日)

新潟水俣病資料館 (新潟県立環境と人間のふれあい館) (2015年11月5日)

九州大学大学文書館 (2016年1月14日～15日, 2月3日～4日)

京都大学大学文書館 (2016年1月28日, 2月25日～26日)

神戸大学附属図書館大学文書史料室 (現・神戸大学大学文書史料室) (2016年2月24日)

金沢大学附属図書館 宮本憲一文庫 (2016年12月17日)

富山県立イタイイタイ病資料館 (2016年2月18日)

【2016年度】

◇第4回研究会 2016年7月16日(土)～17日(日) 国立歴史民俗博物館 第1会議室 参加11人

小杉亮子 「闘いのサイクルとしてみる 1968～69年東大闘争」

黒川伊織 「関西の『1968年』—文化運動・ベトナム反戦・大学闘争—」

相川陽一 「三里塚闘争をめぐって」

安田常雄 「熊本水俣病と横浜新貨物線反対運動をめぐって」

清水靖久 「造反教員について」

根津朝彦 「『1968』をめぐる学生運動と新聞メディア」

河西英通 「北大及び弘前大学をめぐる運動資料について」

終了後全体討論

◇第5回研究会 2016年9月25日(日) 国立歴史民俗博物館 第1会議室 参加10人

平井一臣 「1968年のベ平連」

安田常雄 「横浜新貨物線反対運動と水俣病闘争」

相川陽一 「三里塚闘争と支援闘争」

◇第6回研究会 2016年12月23日(金・祝) 国立歴史民俗博物館 第1会議室 参加10人

この会議では、まず「1968年」のトータルなイメージを議論するため平井一臣氏に「現代日本の社会運動とイデオロギー—1968年を起点として—」と題して、1968年から半世紀の政治社会状況を大きくくりこみに総括する報告をお願いし、関連する議論を行った。その後、展示に関する個別討議を実施し、平井、大串、黒川、河西 各氏の展示資料に関する報告が行われた。

◇個別調査

黒川伊織 関西社会運動の調査

小杉亮子 東大学生運動関係 (東大文書館, 国立歴史民俗博物館)

清水靖久 国立歴史民俗博物館所蔵東大闘争資料

平井一臣 福岡ベ平連調査・埼玉大学教養部市橋秀夫研究室所蔵ベ平連資料調査・立教大学共生社会センター・立命館大学国際平和ミュージアムなどの調査
安田常雄・矢作正 熊本・水俣調査
相川陽一 三里塚調査および宮内庁宮内公文書館調査（三里塚関係）

【2017年度】

◇第7回研究会 2017年4月15日(土)～16日(日) 国立歴史民俗博物館 第1会議室

企画展示図録構成案，展示構成案につき，展示各部分の主担当である平井一臣，安田常雄，矢作正，相川陽一，黒川伊織，清水靖久，小杉亮子，河西英通，荒川章二よりそれぞれ報告がなされ，各パートにつき議論を行った。

◇元日大全共闘議長秋田明大氏聞き取り 2017年5月14日(日)

河西英通・黒川伊織 呉市出張

◇第8回研究会 2017年7月1日(土)～2日(日) 国立歴史民俗博物館 第1会議室

図録入稿後の工程の確認，図録掲載資料以外の展示予定資料の確認，パネル作成，解説シート，資料の集荷・設営，内覧会，プレス対応などにつき打ち合わせを行った。

◇企画展示内覧会 2017年10月10日(火)

歴博フォーラム打合せ実施

◇第9回研究会 2018年1月27日(土)～28日(日) 国立歴史民俗博物館 第1会議室

荒川章二 「企画展示実績報告」(展示アンケートを利用して，展示についての反響に関する報告，および討議)

平井一臣 「ベ平連運動における経験と記憶」

河西英通 「1968～1969年北大紛争における「民主」と「変革」」

◇第10回研究会 2018年3月17日(土)～18日(日) 国立歴史民俗博物館 第1会議室

荒川章二 「研究報告特集号執筆・編集計画について」

小杉亮子 「東大闘争の戦術・戦略に見る1960年代学生運動の男性性」

清水靖久 「学部処分，白紙撤回か白紙還元か——東大紛争の分岐点」

根津朝彦 「大学担当記者から見た「1968年」大学闘争——『毎日新聞』の内藤国夫を中心に」

相川陽一 「運動参加と経験の振り返り——三里塚闘争の支援者支援における「参加の持続」をめぐって」

相川陽一 「三里塚闘争における主体形成と地域変容」

谷合佳代子 「大阪府立旭高校における闘争」

荒川章二 「日大闘争——9.30大衆団交以後——」

2) 資料整理

研究補助業務者およびリサーチアシスタントにより研究の基礎資料となる東大闘争資料，および日大闘争資料の整理を進め，3年間の共同研究期間中に東大闘争資料約6,000点，日大闘争資料約14,000点のリスト化も完了した。なお，東大闘争資料については，共同研究期間中に，追加の資料

受け入れが行われた。

これに加えて、展示実施の関係で、東京教育大全学闘関係資料（1,020点）、東京医科歯科大学紛争関係資料（275点）などの資料群の寄贈を受け、資料整理を実施した。

本館所蔵資料以外にも、展示および研究的に必要なことから、埼玉大学市橋秀夫研究室所蔵福岡ベ平連関係資料（日本社会主義青年同盟福岡資料、1,579点）の目録整備作業を行った。本資料は、近年推進されている地域ベ平連研究をはじめとする地域社会運動研究に寄与すること大と思われる。

このほか、東大闘争資料に関しては、類似資料の収集と整理を進めている東京大学文書館（データベース科研プロジェクト）との意見交換の場を設定し、情報の交流を進めた（2016～17年度）。また、この共同研究・展示をめぐり、国立歴史民俗博物館と東京大学文書館・京都大学大学文書館・九州大学大学文書館・東北大学史料館・北海道大学大学文書館・広島大学文書館・神戸大学附属図書館大学文書史料室（現・神戸大学大学文書史料室）、立教大学共生社会研究センター、法政大学大原社会問題研究所などとの連携・交流に寄与した。こうした連携成果として、研究代表者は、共同研究終了後であるが、2018年5月31日実施の「全国大学史資料協議会東日本部会創立30周年記念シンポジウム」（於：国学院大学渋谷キャンパス）に記念講演者（講演テーマは「大学史と学生生活・活動資料—個別大学史と学生史の間で—」）およびシンポジウムパネラーとして参加した。

4. 成果の概要

1) 企画展示と学会の反応

2017年度国立歴史民俗博物館企画展示「「1968年」—無数の問いの噴出の時代—」を実施、期間は2017年10月11日～12月10日、53日間。最終的な企画展示入場者数は20,635人に達した。アンケート回収率の高さ、展示場滞在時間の長さ、図録の販売部数の多さ、9回のギャラリートーク総参加者が690人（平均77人）に達したこと、メディアの注目、特に新聞の注目が高かったこと（東京新聞の記事や朝日新聞夕刊一面記事掲載、『週刊朝日』や『アエラ』などの雑誌の特集、『中国新聞』2018年1月3日号特集「1968年の問い」）など注目された企画展となった。詳しくは、以下の国立歴史民俗博物館年報への展示終了報告（一部）を参照されたい。

今回の展示をめぐる特徴として、第1にアンケート回収率の高さをあげておきたい。回収数1,469枚、企画展入場者数に対する回収率は7.1%に達した。近年の企画展示でのアンケート回収率としては例外的に高い数字である。また、展示の評価としては、「非常に満足」「満足」が8割を占める。

第2に、このアンケートから見える入場者の属性であるが、60代以上が5割弱、40～50代が35%程度、20～30代以下が2割弱であり、60代後半以上の当時の運動体験者世代は、4割程度と見られる。会場を見ての実感に鑑みても、自分が生まれた時代を確かめようとした壮年層、そして20代の若者の姿も、当初の予想も超えて、多かったと思われる。また、本館への初めての入場者も約3分の1を占め、居住地域では、佐倉市を含む千葉県以外が5割を超え、特に東京都からの来館者が3割に達した。

第3は、展示場滞在時間の長さである。「12:00–16:00まで観たが、それでも短かった」というアンケートでの声をはじめ、宿泊までして2日がかかりという熱心な観覧者にもであった。入場者自身も「熱心に見入っている方が多いのが印象的でした」と記している。本展示がねらいとした、各運動や歴史

文書が発する問いを受けとめようとしていただいたことは、こうした長期間をかけて展示資料と向き合う姿、あるいはアンケートに見る「自身の存在と価値観を問いなおす契機となった」（当時の経験者）、「人の根源的な権利や人間らしさはいつも変わらないと思った。博物館のイメージが少し変わった。今後も様々な視点を考えるきっかけとなるテーマを取り上げてほしい」、「公共性」と「住民（個人）の権利（人権）」の関係、大学における自治や権利、知のあり方への考察など、継続した問いかけを明確化された展示の企画が良かったと思います。館をでてからも考えさせるものでした」等の記載からも窺い知ることができる。そして、このように文字資料を読む込む入場者の姿を反映していようが、第4の特徴として、図録の売り上げ（有償分）が、3,400部に達した（残部0）。無償配付分を含めれば、5,000部以上が行き渡ったこととなる。第5に、関連行事では、歴博講演会参加者が490人、9回のギャリートーク総参加者が690人（平均77人）に達したほか、歴博フォーラムは、台風による悪天候の中で209人の参加、関連企画として実施した歴博映画の会参加者も163人を数えた。

第6に、メディアの注目、特に新聞の注目が高かったことも、特徴であり、多数の記事が入場者の広がり大きく後押しした。特に東京新聞の記事や朝日新聞夕刊一面記事の影響は大で、その他、『週刊朝日』や『アエラ』など講読者が多い雑誌の特集も組まれた。なお、展示終了後であるが、『中国新聞』2018年1月3日号で「1968年の問い」という特集が組まれた。

第7は、学会との関係である。12月9日、10日両日にわたって行われた「同時代史学会」年次総会は、初日に展示に関する議論を行い、2日目に「1968」をめぐる個別報告と議論が行われた。来年度発行の同学会誌では、展示批評を含めて今回の企画展示に関する小特集が組まれる予定であり、その他の学会誌においても展示批評が準備されている。

学会との関係では、上記引用の同時代史学会の例のほか、歴史科学協議会『歴史評論』2018年5月号[818号]では、西田慎「国立歴史民俗博物館「1968年」展を見て」[101-109頁]、『歴史学研究』972号[2018.7]では、戸邊秀明「現代史展示の挑戦と挑発—「1968年」—無数の問いの噴出の時代—」[59-62頁]と題した展示批評が掲載された。

付記：『同時代史研究』第11号[2018年12月]に「小特集 国立歴史民俗博物館企画展示「1968年」—無数の問いの噴出の時代—」をめぐって」掲載。

2) 歴博フォーラムと歴博講演会

展示期間中に行った歴博フォーラム「戦後社会運動のなかの『1968年』」には台風の最中209名の参加をえて会場参加者との活発な質疑が交わされ（予約は288人）、11月11日（土）の歴博講演会「全共闘とは何だったのか—歴博所蔵資料から見える世界—」には490人という多数の参加をえた。

2017年10月21日（土）第107回歴博フォーラム「戦後社会運動のなかの『1968年』」（於：国立歴史民俗博物館 講堂）の概要は下記の通り。内容的には、共同研究・企画展示では取り上げることができなかった沖縄闘争を特に主報告として取り入れ、1968年の社会運動の特質と歴史的意義、およびその限界（問題点）を全体として議論することを狙いとした。報告は以下の6本で、報告者および報告テーマは、

大野光明（滋賀県立大学人間文化学部）「「1968年」と沖縄闘争」

平井一臣（鹿児島大学理事）「平和運動の展開：ベトナム反戦とベ平連運動」
安田常雄（神奈川大学法学部）「経済成長と豊かさへの問い：熊本水俣病闘争」
相川陽一（長野大学環境ツーリズム学部）「三里塚闘争：戦後民主主義と戦後農政への問い」
安田常雄（神奈川大学法学部）「住民運動の噴出とその問い：横浜新貨物線反対運動」
黒川伊織（神戸大学国際文化学研究所）「地方都市から戦後社会を問う：神戸の街から」
荒川章二（国立歴史民俗博物館研究部）「1968年」社会運動と学生・若者」

報告終了後、報告者全員によるシンポジウムを実施した。

フォーラムの評価につき「よかった」65%、「どちらかというと良かった」23%、合わせて88%の好評価が得られ、10時30分～16時30分までの時間枠を越えた長丁場であったにもかかわらず、参加者数がほとんど減らず、討論時間を延ばさざるを得ないほどの多数の質問が寄せられた。

3) 共同研究メンバーの公表成果

① 国立歴史民俗博物館総合誌『歴博』192号 [2015年9月]

特集「近現代日本の社会運動資料」（編集責任：荒川章二）

共同研究メンバー、研究協力者として、平野泉・谷合佳代子・荒川章二執筆

② 法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』697号 [2016年11月] および 698号 [12月]

特集「1968年」と社会運動の高揚」

黒川伊織 「いやがらせの思想—「ベトナムに平和を！」神戸行動委員会の経験」 [697号 16-32頁]

小杉亮子 「全共闘とは何だったのか—東大闘争における参加者の解釈と意味付けに着目して」 [697号 33-48頁]

荒川章二 「1968」大学闘争が問うたもの—一日大闘争の事例に即して」 [698号 1-24頁]

*「特集にあたって」執筆は（展示プロジェクト委員・同研究所教授の鈴木玲）

③ 荒川章二 「戦後史における「1968年」」国立歴史民俗博物館総合誌『歴博』205号 [2017年11月30日]

④ 平井一臣 「現代日本の社会運動とイデオロギー—1968年を起点として—」『法学論集』第52巻1号 [2017年11月]

⑤ 平井一臣 「1968年のベ平連—生成・共振・往還の運動のなかで—」『思想』1129号 [2018年5月]

⑥ 小杉亮子 『東大闘争の語り—社会運動の予示と戦略』新曜社 [2018年4月、全470頁]

4) 研究報告特集

研究報告特集の論考は以下の通りであり、共同研究で行った重要な運動当事者の聞き取り記録（一部）を含めて、2018年度中の刊行を目指す。

ベ平連参加に至るまでの小田実の思想と行動、参加の経緯、ベ平連参加後の「加害の論理」形成過程を追跡した平井論文、安田講堂攻防に向けた最後の重要争点となった文学部学生処分問題を追跡した清水論文、北海道大学における全共闘運動の時代を多面的に、かつ詳細に明らかにした河西論文、三里塚闘争の主体形成を地域構造の変容との関係まで広げて考察した相川論文、1968

年9月30日の大衆団交前後から翌年2～3月のバリケード解体期までの日大闘争の経緯を明らかにした荒川論文、以上5本は、共同研究で取り上げられ、企画展示にも部分的に反映した問題を掘り下げた内容である。また、「1968年」報道の見取り図を東大闘争の専従記者であった内藤国夫に焦点を当てて提示した根津論文、学生運動の軍事的暴力への傾斜によって女性参加者が周辺化し、男性参加者も分節化していったという新たな論点を提示した小杉論文、「1968年」の問いが、1960年安保経験以来どのように内発的に準備されていくのか、さらに全共闘的思想が、こうして内発的に思想を育ててきた集団にどのような影響を与えたのかを追跡した大串研究ノート、高校闘争の一端を資料的に示した谷合資料紹介、以上4本は共同研究では課題として認識されつつも、展示には反映できなかった問題群に関する内容である。日本における反アパルトヘイト運動の研究を促し、「1968年」諸運動と通底する認識を指摘した平野資料紹介では、展示準備や共同研究の過程でも議論の対象とならなかった重要問題を取り上げていただいた。

荒川章二 「共同研究の経過と概要」

平井一臣 「再考・小田実とベ平連ーベ平連への参加と「難死」の思想・「加害」の論理ー」(論文)

清水靖久 「東大紛争大詰めの文学部処分問題と白紙還元説」(論文)

河西英通 「北大闘争の位置と思想」(論文)

根津朝彦 「東大闘争の専従記者から見た「1968年」報道ー『毎日新聞』の内藤国夫を中心にー」(論文)

小杉亮子 「東大闘争の戦略・戦術に見る1960年代学生運動の軍事化ージェンダー的観点からの1960年代学生運動論との接続をめざしてー」(論文)

相川陽一 「三里塚闘争における主体形成と地域変容」(論文)

荒川章二 「日大闘争ー9.30大衆団交以後ー」(論文)

大串潤児 「1960年代のサークル「山脈の会」ー発想とテーマについてのノートー」(研究ノート)

谷合佳代子 「大阪府立旭高校における紛争1969ー山田耕作氏寄贈資料よりー」(資料紹介)

平野 泉 「日本における反アパルトヘイト運動とその記録」(資料紹介)

共同研究委員会 「日大闘争:大場久昭・森 雄一・池上宣文・清宮 誠 各氏 聞き取り」(資料紹介)

以上の成果と研究が、「1968年」研究、さらに戦後社会運動史研究全般への刺激となり、特に若い研究者の参入を促すことができれば幸いである。

(国立歴史民俗博物館名誉教授)